人間発達学研究　第14号
65-77　2023年３月

■論　　文

母親の幼児に対する分離意識の関連要因
――幼稚園児の母親の育児経験と母親アイデンティティに着目して――

服部　沙織*

Related Factors of Mothers' Sense of Separation from Their Children during the Kindergarten Period: Focusing on Child Rearing Experience and Mother Identity

HATTORI Saori

キーワード：母子分離，分離不安，母親アイデンティティ，幼稚園，移行期
mother-child separation，separation anxiety，mother identity，kindergarten，transition

1. 研究の背景と目的

1）幼稚園入園にともなう母親の心配

幼稚園入園は子どもの成長を祝う喜ばしいイベントである一方で，入園前の時期にはSNSや相談サイトに子どもと離れる寂しさや心配を訴える母親の投稿が見られる。ベネッセの調査[1]によると，約80％の保護者が幼稚園・保育所の入園前に心配だったことがあると回答しており，半数以上の保護者が「親と離れてやっていけるか」ということを心配していることが明らかになっている。

日本では現在，5歳の幼児の43.2%が幼稚園に在籍しており[2]，子どもを幼稚園に通わせている母親は専業主婦が多く，家庭で育児に専念している傾向があり[3]，幼稚園入園はそれまで家庭で育児に専念していた母親にとって子どもとの分離を経験する大きな転機の1つであると言える。柏木ら[4]は，乳幼児の親が子どもを預けることが母子双方にとって積極的意味を持つこととととらえつつも罪悪感や懸念の強い母親もいることを示唆しており，藤崎は[5]子どもの園生活について親が心配することで親の育児負担が増す側面があることを明らかにしている。

2）母親の乳幼児に対する分離意識

母親の乳幼児に対する分離意識に関する研究は，子どもの分離不安の研究にずっと遅れて1989年頃からようやく注目されるようになった。Hockら[6]がMaternal Separation Anxiety Scale（MSAS）を開発し，母親自身にとって分離不安がいかなる影響を持つのかを論じた。しかし，母子分離に伴う母親の感情を「分離不安」とする欧米の研究の在り方をそのまま日本に適用することは無理があるという指摘があり[4]，HockらのMSASをもとに塩崎ら[7]が分離意識尺度を開発した。この分離意識尺度を用いた幼稚園の親を対象とした調査で，日本の母親の分離意識に関しては子ども自身の対人的な傾向よりも「伝統的育児観」などの社会的な要因のほうが母親の分離意識への影響が強いことが明らかになった[7]。

* 愛知県立大学大学院人間発達学研究科博士後期課程在籍

ここでの「伝統的育児観」は「3歳までは母親と過ごすことが必要」「子どもの健全な発達にとっては母親とできるだけ多くの時間を共に過ごすことが重要」など，母親が子どもに対して抱える育児責任の重さを反映している社会的な通念としての育児観である[7]。

3）母子分離と母親のアイデンティティの関連

一方で，兼田ら[8]は子の巣立ちという母親役割の終了によりポスト子育て期の母親にアイデンティティの問い直しが起こり，母子分離作業を乗り越える時期と子の巣立ち体験による危機が関連していることを明らかにしている。幼児の母親のアイデンティティに関する研究においては山口[9]の研究があるが，幼児の母親のアイデンティティと母子分離の関連についてはこれまであまり着目されてこなかった。アイデンティティはErickson[10]が提唱した「自分とは何か」という自己認知に関する概念で，山口[9]は「母親という役割を含んだうえで，なおかつ斉一性，連続性を持って自己を確立している状態」を「母親アイデンティティが形成された状態」と定義している。山口は遠藤[11]が作成した青年期の個人としてのアイデンティティを測定するための尺度をもとに母親アイデンティティ尺度を開発し，この尺度を用いて幼稚園の母親を対象に調査を行った結果，母親アイデンティティは「母親役割受容」「母親役割評価」「母親役割認知」の3つの要素からなっており，育児ストレスをあまり感じないでいられる母親は母親アイデンティティ得点が高いことを明らかにした。また，塩崎ら[7]は幼児の父親の母子分離意識が母親の「親としてのアイデンティティ」の発達と関連していることを明らかにしている。

4）幼稚園生活が母親の「親育ち」に与える影響

幼稚園に入園してからの母親の変化については，子どもが幼稚園に入園することで子どもが園生活を家庭に持ち込み，母親はこれに対応することを通して親も家庭にいながらにして園生活に巻き込まれていくことが明らかになっている[5]。筆者が行った小学生の母親を対象とした幼稚園3年間に関するインタビュー調査では「幼稚園生活は母親自身と我が子について新たな気づきを園児の母親に与えるきっかけとなって母親の意識や行動の変容を促すとともに，園児とその母親に心理的な影響を与える可能性がある」ことを示唆する結果であった[12]。これらの研究により，幼稚園入園によって母親が子どもの幼稚園生活に巻き込まれ，幼稚園3年間で母親の子どもに対する分離意識にも変化がある可能性が考えられる。

親には子どもを持つことによる心理的発達があることがこれまで明らかにされてきた。この心理的発達について心理学分野では「親となることによる発達」[13]，保育学分野では「親育ち」[14]などのテーマで研究が継続されており，楠本はこれらの先行研究から「親育ち尺度[15]」を開発した。この尺度は「自己の強さ」「生き甲斐・存在感」「協調性」「自己制御」「自分の親への感謝」「子どもに対する責任感」「柔軟さ」の7因子で構成されている。さらに楠本はこの「親育ち尺度[15]」を用いて「親の養育態度」は「親育ち」から影響を受け，その「親育ち」は「親役割意識」に影響されるということを明らかにしている[16]。

5）本研究の目的

子どもの園生活について親が心配することで親の育児負担が増す[5]ことから，幼稚園生活にともなう母親の心配や不安とその変化を明らかにすることは幼稚園でのよりよい育児支援につながると考える。また，入園まもない母親はもちろんのこと，幼稚園の3年間を通して母子分離の心配がある母親を支援する必要もあるだろう。

幼稚園児の母親の子どもとの分離に関しては，幼稚園入園直後の母親に関する研究[5] [17] [18]が中心であり，幼稚園3年間を通した母親の分離意識の変化や卒園間際の母親の分離意識については管見する限りみられない。子の巣立ちという母親役割の終了によりポスト子育て期の母親にアイデンティティの問い直しが起こり，母子分離作業を乗り越える時期と子の巣立ち体験による危機が関連していることから，幼稚園入園後の母子分離と母親アイデンティティの関連が考えられるのではないだろうか。また，幼児の母親のアイデンティティに関する研究においては山口[9]の研究があるが，幼児の母親のアイデンティティと母子分離の関連についても管見する限りみられない。

そこで本研究では，幼稚園3年間での母親の子どもに対する分離意識の変化について，入園直後と卒園間際の母親の分離意識の状況を比較することで明らかにする。次に，分離意識にどのような要因が関連しているのかを育児経験と母親アイデンティティの観点から検討したい。さらに，これらと分離意識との関連が入園直後と卒園間際で違いがあるのかということについても検討する。

上記について検討するにあたり，幼稚園・保育所の入園前に約半数の保護者が親との分離について心配している[1]ことから，本研究では育児の心配や不安のなかでも「母子分離意識」に限定する。産後6ヶ月時点での育児の「自信のなさ」は第一子の母親の育児不安と関連があったことが足立[19]によって報告されており，母子分離の不安や心配にも子の出生順位や経験が関連していることが考えられるため，子の出生順位および幼稚園入園前の保育利用経験による関連にも着目をする。それに加えて，ポスト子育て期の母子分離とアイデンティティの関連が明らかになっている[8]ことから幼児期の母親においても母子分離とアイデンティティの関連が考えられるため，アイデンティティの関連も検討する。この研究目的を追求するために，以下のような2つの仮説と課題を立て，その検証を試みる。

①仮説：幼稚園入園直後の年少母と卒園間際の母親の子どもに対する分離意識には違いがあるだろう。
課題：母子分離意識は入園直後と卒園間際でどのような違いがあるのだろうか。違いが見られない場合はなぜなのか。違いが見られる場合はどのような育児経験が関連しているのだろうか。

②仮説：幼稚園児の母親の子どもに対する分離意識は母親アイデンティティと関連があるだろう。
課題：母子分離意識は母親アイデンティティとどのような関連があるのだろうか。入園直後の年少母と卒園間際の年長母でどのような違いがあるのだろうか。

なお，幼稚園3年間の母親の子どもに対する分離意識の変化をみるためには，本来なら同一の対象者で調査を行って年少の時と年長の時の母子分離意識を比較するのが望ましいが，今回は時間的な制約があるため同じ幼稚園の年少児と年長母を比較し，その違いについて検討する。

また，就労の状況によって心理的ストレス[9]や心理的葛藤[20]が幼稚園児の母親と保育園児の母親では異なる傾向があり，母子分離のタイミングも異なる[17]傾向があるため，本研究では幼稚園児の母親のみを対象とする。また，幼児の父親と母親では認識している育児行為が異なる[21]傾向があることから，今回は対象に父親を含めない。

2. 研究方法

1）質問対象および方法

愛知県のA幼稚園とB幼稚園に子どもを通わせている卒園間際の年長児の母親（以下，年長母）と入園間もない年少児の母親（以下，年少母）を対象として質問紙調査を実施した。いずれの幼稚園も3歳4月年少入園前の3歳児クラスや不定期の親子登園によるプレ幼稚園の機会を有するが，3歳4月からの3年保育のカリキュラムを基本とした私立幼稚園である。

年長母は2021年1月下旬～2月上旬に質問紙調査を実施，年少母は2021年6月下旬に質問紙調査を実施した。

年少母については入園まもない5月上旬に実施する予定だったが，COVID-19の感染拡大により緊急事態宣言が発令されたため，緊急事態宣言が解除された6月下旬に実施した。

なお，本調査は，複数の調査項目をまとめて1つの質問紙にしたものの一部として実施した。

2）質問内容

①フェイスシート

回答者の属性として，年齢，就業状況，子どもの数，対象の子どもの性別，対象の子どもの兄弟姉妹の順序，年少入園前の保育利用の有無の7項目である。

②母子分離意識尺度；塩崎ら[7]が開発した「分離意識尺度」の質問項目をもとに23項目を設定した。本研究では幼稚園登園後の母子分離に焦点をあてるため，幼稚園の分離に適した文言に一部変更した（例：子どもは他の人といるよりも自分といる方が幸せだと思う→我が子は幼稚園の先生や幼稚園の友達といるよりも母

親といる方が幸せだと思う)。各項目の回答に1点から5点（1. ぜんぜんそう思わない～5. まったくその通りである）を与えて母子分離意識得点とした。

③母親アイデンティティ尺度；山口が開発した「母親アイデンティティ尺度」の11項目を設定した。各項目の回答に1点から5点（1. ぜんぜんそう思わない～5. まったくその通りである）を与えて母親アイデンティティ得点とした。

3）統計解析

母子分離意識に関する質問項目は先行研究[7]にならい因子分析（最尤法･斜交回転）を行い，母親アイデンティティに関する質問項目も先行研究[9]にならい主成分分析（主成分法･直行回転）を行った。その際に因子負荷量0.35以上の項目を採用し因子・主成分を決定した。因子・主成分別に構成する項目の内的整合性をω係数で評価し，因子・主成分ごとに下位尺度得点を算出した。母子分離意識の下位尺度得点差の検定にはWelchの検定を用い，母子分離意識の因子と母親アイデンティティの主成分の変数間の関連をみるために重回帰分析を実施した。なお，解析にはHAD17[22]を用いた。

4）倫理的配慮

対象園の園長に調査の詳細を記した依頼状と質問紙のサンプルを渡し，さらに調査について口頭で園長に説明をして同意を得た上で実施した。質問紙のフェイスシートには調査の目的と個人情報の保護を記して無記名とし，ID番号によって管理した。フェイスシートには調査への同意を確認する項目を設け，調査に同意を得られた対象者の質問紙のみ分析に利用した。

質問紙の分析結果については，各幼稚園の園長と年長母に資料を配布してデブリーフィングを実施するよう計画した。資料には，「調査協力のお礼」「調査目的」「問い合わせ先」「個人情報の扱い」を記載した。調査結果を知りたい回答者には報告書請求をしてもらい，調査結果の報告書を送付する旨も記載した。さらに，筆者が所属していた大学の倫理項目についてチェックを行い，大学に届け出が受理されている。

3. 結果

1）質問紙の回収状況と対象者の特徴

① 年少母の基本的属性

107部を配布し，回収した総数は90部で，回収率は84.0%であった。そのうち不備があった質問紙を除外し84部の質問紙が分析可能であった。母親の年齢の平均は35.4歳（$SD=4.95$）で，23歳から46歳であり，年齢不明が3人だった。子どもの数の平均は2.1人（$SD=0.92$）であり，1人から6人の子どもを養育しており，そのうち第一子は34人（40.5%）で，不明が1名であった。対象者84人のうち，フルタイム勤務4人（4.0%），パートタイムやアルバイト22人（26.2％），時短勤務3人（3.6%），フリーランス5人（6.0%），産休育休中4人（4.8%），不明が1人（1.2%）で，45人（53.6%）が専業主婦だった。対象の年少児の年少入園前の保育の利用状況は,「通っていた」40人（47.6%),「通っていなかった」42人（50.0%），不明が2人（2.4%）であった。

② 年長母の基本的属性

141部を配布し，回収した総数は120部で回収率は85.1%であった。そのうち不備があった質問紙を除外し111部の質問紙が分析可能であった。母親の年齢の平均は37.5歳（$SD=4.89$）で，24歳から48歳であり，不明が2名であった。子どもの数の平均は2.0人（$SD=0.87$）であり，1人から6人の子どもを養育しており，そのうち第一子は45人（40.5%）で，不明が1名であった。対象者111人のうち，フルタイム勤務1人（1.8%），パートタイムやアルバイト34人（30.6％），時短勤務6人（5.4%），フリーランス2人（1.8%），その他2人（1.8%）で，65人（65.0%）が専業主婦だった。対象の年長児の年少入園前の利用状況は,「通っていた」37人（33.3%），「通っていなかった」73人（65.8%）であった。

A幼稚園とB幼稚園は幼稚園の規模や母親の属性の状況が近かったことから，分析の対象として妥当であると判断し，あわせた195部について分析を行った。

2）幼稚園児の母親の子どもに対する分離意識

① 母子分離意識の構成要素

年少母と年長母のデータを合算した195部を用いて，母子分離意識尺度23項目について探索的因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った。先行研究[7]では4因子が抽出されており，また，スクリー基準からも4因子が妥当だと考えられるため4因子とした。その結果から，因子負荷量0.35以上の項目を採用し，どの因子に対しても因子負荷量が低い1項目と2つ以上の因子に対して因子負荷量が高い1項目を削除して再度因子分析を行った。最終的に21項目を採用し，再度同様の手法で因子分析を行った結果，表1の4因子構造が見出された。各因子の定義については以下に記す。

〈母親優位感〉

第1因子は「我が子は幼稚園の先生や幼稚園の友達といるよりも母親といる方がしあわせだと思う。」など，子どもにとって母親は特別な存在であると認識している項目で負荷量が高くみられたため，〈母親優位感〉と名付けた。

〈登園後の心配〉

第2因子は「我が子が登園したあと，幼稚園でう

表1　母子分離に関する質問項目の因子分析結果

母子分離意識項目	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
〈母親優位感〉					
我が子は幼稚園の先生や幼稚園の友達といるよりも母親といる方がしあわせだと思う。	**.734**	−.169	.095	.103	.429
我が子は幼稚園の先生があそんだり世話をしてくれても，なかなか慣れないと思う。	**.692**	.056	−.194	−.096	.516
我が子は母親が一緒にいないと，こわがったりさみしがったりするだろう。	**.689**	.028	.010	.066	.471
我が子は幼稚園の先生や幼稚園の友達よりも母親といる方がいいと思う。	**.656**	−.129	.032	.134	.318
幼稚園では我が子は完全に安らぐことはないのではないかと心配になる。	**.594**	.168	−.043	−.106	.546
我が子は幼稚園にいるあいだ，母親がいないことをさみしいと感じるに違いない。	**.593**	.119	−.017	−.087	.495
我が子の安全をじゅうぶんに気づかうことができるのは，母親であると思う。	**.581**	−.145	.075	.149	.253
きげんが悪い我が子をなだめる方法は，母親だけが知っている。	**.544**	−.009	−.059	−.058	.298
我が子を幼稚園の先生に預けて母親が帰ったら，我が子は動揺するだろう。	**.462**	.171	.042	−.218	.506
幼稚園に我が子を預けているあいだ，我が子の安全に十分に目が行き届かないのではないかと思う。	**.418**	.139	.166	.085	.330
〈登園後の心配〉					
我が子が幼稚園で失敗したりうまくいかないことがあるのではないかと不安になる。	−.078	**.909**	.057	.110	.748
我が子が登園したあと，幼稚園で友達とうまくやれているか気になる。	−.112	**.829**	.001	.140	.563
幼稚園で我が子の機嫌が悪くなったら，幼稚園の先生が子どもをなだめることができるかどうか気になる。	.046	**.700**	−.085	−.060	.522
幼稚園の先生が我が子と一緒にいるとき，我が子のことが心配になる。	−.027	**.528**	.120	−.056	.335
〈登園後の恋しさ〉					
我が子とのスキンシップはとてもここちよいので，登園して離れているとスキンシップができないことをさみしく感じる。	−.043	.024	**.888**	−.001	.774
我が子が登園して離れていると，たいへんさみしく，我が子が恋しくなる。	−.079	.081	**.820**	−.086	.688
我が子が登園して離れていると，スキンシップをしてあげられないことをさみしく思う。	.270	−.057	**.681**	−.013	.641
〈分離肯定感〉					
我が子にとって母親と離れて幼稚園で過ごすことは，新しいできごとにうまく対処できるようになるためによいことである。	.148	.070	−.011	**.839**	.616
幼稚園で多くの異なる人と接することが我が子に必要である。	.190	.104	−.059	**.802**	.551
登園で我が子が母親と離れるときに泣いてしまったとしても，母親の姿がみえなくなってしばらくすれば，大丈夫であるとわかっている。	−.190	−.119	.033	**.538**	.470
幼い我が子にとって，母親よりも他の人と接したい時があると思う。	−.130	.054	−.054	**.500**	.310
ω係数	.856	.833	.873	**.753**	

因子間相関

	因子1	因子2	因子3	因子4
因子1		.597	.383	−.393
因子2			.325	−.253
因子3				−.085

抽出法：最尤法　回転法：プロマックス法

まくやれているか気になる。」など，子どもが登園したあとに子どものことを心配している項目で負荷量が高くみられたため〈登園後の心配〉と名付けた。

〈登園後の恋しさ〉

第3因子は「我が子が登園して離れていると，たいへんさみしく，我が子が恋しくなる。」など，子どもが登園したあとに子どものことを恋しく思っている項目で負荷量が高くみられたため〈登園後の恋しさ〉と名付けた。

〈分離肯定感〉

第4因子は「幼稚園で多くの異なる人と接することが我が子に必要である。」など，子どもが母親から離れることを肯定的にとらえた項目で負荷量が高くみられたため〈分離肯定感〉と名付けた。

なお，各因子の得点はその傾向の高さを示し，第4因子の得点が高いことは分離を肯定する傾向が強いことを表す。ω係数はそれぞれ.856，.833，.873，.753と十分な値が得られた。各因子間の相関係数は第4因子で他の因子間との間に負の相関があり，それ以外の因子間では正の相関があった。この4因子を母子分離意識の下位尺度として，各下位尺度の合計得点を算出した。

② 母子分離意識と学年との関連

母親分離意識下位尺度得点が年少母と年長母の2群で異なるかを検討するためt検定を行った。2群は等分散性がないためWelchの検定を加えたところ，年長母の〈登園後の心配〉（$M=2.26$，$SD=0.95$）は年少母の〈登園後の心配〉（$M=2.62$，$SD=0.92$）よりも有意に低かった（$t(182.43)=2.73$，$p=.007$）。〈母親優位感〉〈登園後の恋しさ〉〈分離肯定感〉では有意な差は見られなかった。

3）母子分離意識と育児経験の関連

① 母子分離意識と子どもの出生順位との関連

年少児の第一子の母親と第二子以降の母親の2群でt検定を行ったところ，第二子以降の年少母の〈登園後の心配〉は第一子以降の年少母の〈登園後の心配〉よりも有意に低かった。第二子以降の年少母の〈母親優位感〉と〈登園後の恋しさ〉は第一子の年少母よりも有意に低い傾向がみられた。〈分離肯定感〉では年少児の第一子の母親と第二子以降の母親に有意な差はみられなかった。

次に，同様の方法で年長児の第一子の母親と第二子以降の母親の2群でt検定を行ったところ有意な差はみられなかった。

なお，子どもの出生順位が不明の年長母の1部を除外して検定を行った。（表2）

表２　子どもの出生順序別母子分離意識得点

	学年	n	出生順位	M	SD	t	df	Welchの検定
母親優位感	年少母	84	第一子 第二子以降	1.91 1.66	0.73 0.46	−1.80	50.95	+
	年長母	110	第一子 第二子以降	1.74 1.66	0.64 0.56	−0.67	86.56	n.s
登園後の心配	年少母	84	第一子 第二子以降	2.87 2.46	0.90 0.90	−2.07	70.76	*
	年長母	110	第一子 第二子以降	2.39 2.15	1.01 0.91	−1.32	87.75	n.s
登園後の恋しさ	年少母	84	第一子 第二子以降	2.23 1.87	0.93 0.86	−1.79	67.31	+
	年長母	110	第一子 第二子以降	1.80 1.83	0.86 0.92	0.18	99.19	n.s
分離肯定感	年少母	84	第一子 第二子以降	4.63 4.62	0.41 0.49	−0.12	77.94	n.s
	年長母	110	第一子 第二子以降	4.67 4.60	0.55 0.54	−0.67	93.54	n.s

+$p<.10$，*$p<.05$

② 母子分離意識と年少入園前の保育利用経験との関連

年少入園前に何らかの保育を利用していた年少母と保育を利用していなかった年少母の2群でt検定を行ったところ，保育を利用していた母親の〈登園後の心配〉は保育を利用していなかった年少母よりも有意に低い傾向がみられた。〈母親優位感〉〈登園後の恋しさ〉〈分離肯定感〉では有意な差はみられなかった。

次に，同様の方法で年少入園前に何らかの保育を利用していた年長母と保育を利用していなかった年長母の2群でt検定を行ったところ，保育を利用していた母親の〈分離肯定感〉は保育を利用していなかった年少母の〈分離肯定感〉（$M=4.57$，$SD=0.58$）よりも有意に高い傾向がみられた。

なお，年少入園前の保育利用状況が不明の年少母の2部と，年少入園前の保育利用状況が不明の年長母の1部を除外して検定を行った。（表3）

4）幼稚園児の母親のアイデンティティ

① 母親アイデンティティの構成要素

年長母と年少母のデータを合算した195部を用いて，母親アイデンティティ尺度11項目について主成分分析を行った。先行研究[9]では3主成分が抽出されており，また，スクリー基準からも3主成分を抽出することが妥当であると考えられ，3主成分とした。その際，他の項目との整合性が低いと判断した4項目を除外して再度主成分分析を行い，最終的に7項目を採用した。各項目については，第1主成分，第2主成分，第3主成分のいずれの項目も先行研究と同じ結果が得られたが，先行研究とは主成分の各項目の数が異なることから新たな主成分名をつけた。各主成分の定義については，以下に記す。

〈母親役割自信〉

第1主成分では「子どもにとっていい母親であると思っている」「母親として一人前だと思っている」「母親としてうまくやっていける自信がある」という項目からなり，母親であることに対して自信を持っていることが表現されていることから〈母親役割自信〉と名付けた。先行研究では〈母親役割評価〉にあたる主成分である。

〈母親役割受容〉

第2主成分では「母親としてふるまっているときが，いちばん自分らしいと思う」「母親として子育てを楽しんでいる」という項目からなり，自分が母親であるということに対して受容していることが表現されていることから〈母親役割受容〉と名付けた。先行研究では〈親役割受容〉にあたる主成分である。

表３　年少入園前の保育利用経験別母子分離意識得点

	学年	n	保育利用経験	M	SD	t	df	Welchの検定
母親優位感	年少母	82	あり なし	1.79 1.75	0.69 0.50	0.23	70.80	n.s
	年長母	110	あり なし	1.68 1.71	0.49 0.64	0.26	90.56	n.s
登園後の心配	年少母	82	あり なし	2.41 2.80	0.81 0.98	−1.97	78.36	+
	年長母	110	あり なし	2.11 2.33	0.99 0.94	2.33	0.94	n.s
登園後の恋しさ	年少母	82	あり なし	1.93 2.14	0.81 0.98	−1.10	78.47	n.s
	年長母	110	あり なし	1.71 1.85	0.90 0.88	0.79	70.79	n.s
分離肯定感	年少母	82	あり なし	4.58 4.67	0.52 0.40	−0.89	73.44	n.s
	年長母	110	あり なし	4.75 4.57	0.43 0.58	−1.82	93.44	+

$+p<.10$，$^{*}p<.05$

表４　母親アイデンティティに関する質問項目の主成分分析結果

	主成分１	主成分２	主成分３	共通性
〈母親役割自信〉				
子どもにとっていい母親であると思っている。	**.809**	.269	−.078	.734
母親として一人前だと思っている。	**.808**	−.006	−.115	.666
母親としてうまくやっていける自信がある。	**.779**	.263	−.203	.717
〈母親役割受容〉				
母親としてふるまっているときが，いちばん自分らしいと思う。	.135	**.851**	−.049	.745
母親として子育てを楽しんでいる。	.195	**.841**	−.075	.751
〈母親役割不明〉				
母親としてどうあるべきなのかまったくわからない。	−.062	−.104	**.889**	.805
この先，子育てをどう進めればいいのか見当もつかない。	−.233	−.021	**.849**	.776
ω係数	.873	.855	.881	

抽出法：主成分法　回転法：バリマックス法

〈母親役割不明〉

第3主成分では「母親としてどうあるべきなのか全くわからない」「この先，子育てをどう進めればいいのか検討もつかない」という項目からなり，母親としての役割に対して不確かで見通しが持てていない様子から〈母親役割不明〉と名付けた。先行研究では〈親役割認知〉にあたる主成分である。

なお，各主成分の項目ごとの負荷量とω係数を表4に示した。ω係数はそれぞれ.856，.833，.873，.753であり，十分な値が得られている。また，母親アイデンティティ下位尺度間のピアソンの積率相関係数を表5に示した。

表５　母親アイデンティティ下位項目間の相関係数

	母親役割自信	母親役割受容	母親役割不明
母親役割自信	1.00		
母親役割受容	.37**	1.00	
母親役割不明	−.27**	−.03	1.00

*p<.05，**p<.01

②　母子分離意識と母親アイデンティティの関連

母親アイデンティティによって年少母と年長母の子どもに対する分離意識の関連が予測できるかを検討するために，母子分離意識と母親アイデンティティの下位尺度得点を用いて，母親アイデンティティの下位項目を説明変数，母子分離意識の下位項目を目的変数として，それぞれについて重回帰分析を行った。なお，分析は年少母と年長母のそれぞれについて行い，変数は強制投入とした。それぞれの重回帰分析結果は表6に示す通りである。

②–1　母親アイデンティティによって〈母親優位感〉との関連が予測できるかの検討

〈母親役割自信〉〈母親役割受容〉〈母親役割不明〉を説明変数，〈母親優位感〉を目的変数として重回帰分析を行った結果，年少母にはいずれも有意な関連は見られなかった。

年長母においては〈母親役割自信〉と〈母親役割不明〉が有意な結果を予測していた（表6）。表5に示された説明変数間の相関係数は中程度以下であり，またVIFも1.09から1.26の間にあるため多重共線性の問題はないと考えられる。

②–2　母親アイデンティティによって〈登園後の心配〉との関連が予測できるかの検討

〈母親役割自信〉〈母親役割受容〉〈母親役割不明〉を説明変数，〈登園後の心配〉を目的変数として重回帰分析を行った結果，年少母にはいずれも有意な関連は見られなかった。一方で，年長母の〈母親役割不明〉は〈登園後の心配〉を有意に予測していた。

②–3　母親アイデンティティによって〈登園後の恋しさ〉との関連が予測できるかの検討

〈母親役割自信〉〈母親役割受容〉〈母親役割不明〉を説明変数，〈登園後の恋しさ〉を目的変数として重回帰分析を行った結果，年少母と年長母の〈母親役割受容感〉は〈登園後の恋しさ〉を有意に予測していた。

②–4　母親アイデンティティによって母親の〈分離肯定

表６　母親アイデンティティ下位項目を目的変数とした重回帰分析結果

年少母　母親優位感（n=84）	b	SE	B
母親役割自信	−0.08	0.11	−.10
母親役割受容	0.07	0.09	.09
母親役割不明	−0.03	0.09	−.04
R^2	.01		

年長母　母親優位感（n=111）	b	SE	B
母親役割自信	0.24	0.08	.33**
母親役割受容	−0.02	0.07	−.03
母親役割不明	0.17	0.07	.24*
R^2	.11**		

年少母　登園後の心配（n=84）	b	SE	B
母親役割自信	0.07	0.16	.057
母親役割受容	0.02	0.14	.017
母親役割不明	0.14	0.14	.122
R^2	.01		

年長母　登園後の心配（n=111）	b	SE	B
母親役割自信	0.13	0.13	.107
母親役割受容	−0.02	0.11	−.022**
母親役割不明	0.34	0.12	.282
R^2	.07*		

年少母　登園後の恋しさ（n=84）	b	SE	B
母親役割自信	−0.20	0.15	−.156
母親役割受容	0.34	0.13	.311*
母親役割不明	−0.18	0.13	−.166
R^2	.12*		

年長母　登園後の恋しさ（n=111）	b	SE	B
母親役割自信	0.19	0.11	.168
母親役割受容	0.27	0.10	.255*
母親役割不明	0.07	0.11	.065
R^2	.12**		

年少母　分離肯定感（n=84）	b	SE	B
母親役割自信	0.04	0.08	.058
母親役割受容	−0.03	0.07	−.061
母親役割不明	0.01	0.07	.023
R^2	.00		

年長母　分離肯定感（n=111）	b	SE	B
母親役割自信	−0.08	0.07	−.119
母親役割受容	0.02	0.07	.032
母親役割不明	−0.08	0.07	−.119
R^2	.02		

*p<.05,　**p<.01

感〉との関連が予測できるかの検討

〈母親役割自信〉〈母親役割受容〉〈母親役割不明〉を説明変数，〈分離肯定感〉を目的変数として重回帰分析を行った結果，年少母，年長母ともに有意な関連は見られなかった。

4. 考察

1）幼稚園入園直後の年少母と卒園間際の年長母の子どもに対する分離意識の状況とその比較

幼稚園児の母親の子どもに対する分離意識について因子分析をした結果，〈母親優位感〉〈登園後の心配〉〈登園後の恋しさ〉〈分離肯定感〉と名付けられる4つの因子が抽出された。ω係数から因子を構成する項目についての内的整合性は高いと言える。この4つの因子それぞれは，分離意識尺度を作成した塩崎ら[7]の因子分析の結果と類似の結果となった。

年少母と年長母分離意識下位尺度得点を対応のないt検定を行って比較したところ，〈登園後の心配〉については有意な差がみられ，年長母の〈登園後の心配〉のほうが年少母よりも有意に低かった。この点に関して幼稚園入園直後に母親は子どもとの分離に抵抗があったが卒園間際には分離の抵抗がほぼなくなっていたという服部[12]のインタビュー調査結果を支持する内容であった。

〈母親優位感〉〈登園後の恋しさ〉〈分離肯定感〉については年少母と年長母には有意な差がないという結果であった。なかでも〈分離肯定感〉については年少母と年

長母ともに尺度得点平均が4.6を越えていた（年少母：4.62，年長母：4.63）。このことから，幼稚園児の母親は年少入園時から幼稚園卒園までの3年間を通して幼稚園に子どもを預けることを肯定的に捉えていると推察することができる。幼稚園児の母親が子どもとの分離に肯定的なのは，子どもを幼稚園に通わせている母親は専業主婦が多く，家庭で育児に専念している傾向があり[3]，子どもとの時間が十分にとれているからではないだろうか。幼児の母親の子どもに対する分離意識についてより明らかにするためには，保育利用開始時期が早くて保育時間が長い保育所の園児の母親との比較も必要である。

2）母子分離意識と育児経験の関連

子どもの出生順序に着目して，第一子の年少母と第二子以降の年少母，第一子の年長母と第二子以降の年長母の母子分離意識下位尺度で対応のないt検定を行った結果，年少母では第一子に比べて第二子以降が〈登園後の心配〉が有意に低く，〈母親優位感〉と〈登園後の恋しさ〉においても有意に低い傾向が見られた。一方で，年長母では第一子と第二子以降でいずれも有意な差や傾向はみられなかった。このことから，幼稚園の3年の間に第一子の母親と第二子の母親の育児経験の差が縮まることにより母子分離意識の差も縮まる可能性を本研究から示唆することができる。幼稚園3年間でのどのような育児経験が母子分離意識と関連しているのかは本研究からは不明だが，今後明らかにすることで第一子の母親の分離の心配や不安を軽減する手立てになるだろう。

さらに，年少入園前の保育利用の有無に着目をして年少母と年長母の母子分離意識下位尺度を対応のないt検定を行って比較したところ，年少入園前に保育を利用して母子分離を経験していた年少母は，利用しなかった年少母よりも〈登園後の心配〉が有意に低い傾向がみられた。年少入園前に何らかの保育を利用して母子ともに分離に慣れておくことは年少入園後の〈登園後の心配〉の軽減のために有効であるといえる。また，年少入園前に保育を利用していた年長母は，利用しなかった年長母よりも〈分離肯定感〉が有意に高い傾向がみられた。年少入園前に保育を利用することで，利用しなかった場合よりも母子分離の経験年数が積み重ねることができることが〈分離肯定感〉の高さにつながると考えられる。

3）母子分離意識と母親アイデンティティの関連

母親アイデンティティ尺度について先行研究[9]にならい主成分分析をした結果，〈母親役割自信〉〈母親役割受容〉〈母親役割不明〉と名付けられる3つの主成分が抽出された。ω係数から主成分を構成する項目についての内的整合性は高いと言える。

次に，母子分離意識と母親アイデンティティの関連について検討をするために，母親アイデンティティ下位尺度を説明変数，母子分離意識下位尺度を目的変数としてそれぞれ重回帰分析を行った。その結果，年長母の〈母親役割自信〉は1%水準で〈母親優位感〉を有意に予測していた。〈母親優位感〉は子どもにとって自分は特別な存在であると認識している因子で，母親としての役割に自信を持つことは，子どもにとって自分は特別な存在であるという認識と関連していることを今回の結果から示唆することができる。一方で，〈母親役割不明〉も5%水準で〈母親優位感〉を有意に予測していた。〈母親役割不明〉は母親としての役割に対して不確かで見通しが持てていない主成分であり，一見〈母親役割自信〉とは相反する意味合いを持つ主成分であるにもかかわらず有意な結果がみられた。

今回〈母親優位感〉に〈母親役割自信〉だけでなく〈母親役割不明〉も関連していたという結果について入園直後の年少母ではこのような関連は見られなかったことから，就学を控えた年長母特有の心境であると言うことができ，以下の2つの理由が考えられる。1つ目は，子どもの卒園と就学を控えた年長の母親ならではの心境の不安定さである。綾野ら[23]は幼稚園から小学校への移行期の母親に「子離れに対する不安と子どもの自立を受け入れるというアンビバレンツな気持ちが混在する」ことを見出している。2つ目は，就学を控え，子どもの発達に心配がある母親の心境の不安定さである。文部科学省の調査[24]によると，小学校の1年生の9.8%が知的発達に遅れはないものの各行動面で著しい困難を示していることが明らかになっている。よって，年長の卒園間際においても各行動面で著しい困難を示している園児がいる可能性も考えられ，子どもが自分以外に迷惑をかけてし

まうくらいなら自分が子どもをみたほうがいいと責任を感じるような母親の心境が〈母親優位感〉として表れたのではないだろうか。

しかし，これらについては今回の調査からは推測しかできないため，〈母親優位感〉と〈母親役割不明〉の関連については〈母親優位感〉の得点が高い年長母にインタビュー調査などを実施して〈母親優位感〉と〈母親役割不明〉との関連を質的に丁寧に検討する必要があるだろう。

一方で，年長母の〈母親役割不明〉は〈登園後の心配〉も有意に予測していた。これも年少母にはみられなかった結果であり，就学を控えた年長母特有の傾向であると言える。幼稚園は母子一緒に通って母子の密着度が高かったが，小学校に入学して子どもと分離することで母親は子どもの様子がわからないことへの不安感が強くなったことが窺がわれる事例が綾野ら[23]によって報告されており，今回の結果においても就学を控え母親としての役割に見通しが持てない感じが〈登園後の心配〉と関連しているという結果につながったのではないだろうか。

そして，年少母と年長母の〈母親役割受容〉はどちらも〈登園後の恋しさ〉を有意に予測していた。〈母親役割受容〉は「母親としてふるまっているときが，いちばん自分らしいと思う」「母親として子育てを楽しんでいる」という項目からなっており，登園して子どもと離れることで自分らしさを感じられなくなることから，子どもが登園したあとに恋しさを感じるのではないかと推察する。

4）総合考察

年少母と年長母に分けて母子分離意識の関連要因を検討することで，母子分離意識の関連要因は年少母と年長母で様相が一部異なっていることが明らかになった。年少母の〈登園後の心配〉には子どもの出生順位や年少入園前の保育利用経験などの育児経験が関連しているのに対して，年長母の〈登園後の心配〉には〈母親役割不明〉が関連していた。年長母の〈登園後の心配〉は年少母よりも有意に低くなっており，年長母には子どもの出生順序や年少入園前の保育利用経験は〈登園後の心配〉に有意な関連がないという結果から考えると，幼稚園の3年間を経験してもなお母子の分離に課題がある母親には育児経験では埋められない母親アイデンティティや母親役割意識が母子分離意識に関連しているのではないだろうか。

兼田ら[8]は子の巣立ちという母親役割の終了によりポスト子育て期の母親にアイデンティティの問い直しが起こり，母子分離作業を乗り越える時期と子の巣立ち体験による危機が関連していることを明らかにしている。幼稚園卒園の時期は母親役割が終了する時期ではないが幼児期の終わりと就学という子の巣立ちに関わる重要な節目であり，年長母にも子どもの成長とともにアイデンティティや母親役割意識の変化が起こっている可能性が考えられる。

子どもの園生活について親が心配することで親の育児負担が増す側面があることが明らかなっており[5]，幼児の親の育児支援のために幼稚園は重要な役割を持つ。しかし，これまで幼稚園児の母親の分離に関しては幼稚園入園直後の母親の研究が中心であり，就学を控えた卒園間際の年長母の母子分離についてはこれまであまり注目されてこなかった。しかし，本研究で年少母と年長母の子どもに対する分離意識とその要因を比較検討することで，年長母には年少母とは違う関連要因から母子分離の課題があることを明らかにすることができた。

幼稚園から小学校への移行期の子離れに関する不安，子どもの自立の受容とそれに伴う寂しさを母親が感じていることも綾野ら[23]によって報告されている。母子分離に不安や心配がある入園直後の年少母のフォローをするとともに就学を控えた年長母にも目を向け，母親アイデンティティや母親役割意識の観点から年長母のフォローをすることは小学校への移行期の育児を支える手立ての1つになると考える。

また，昨今，就学後の不登校の原因の1つとして「親子の関わり方」がある。文部科学省の調査[25]によると，小学生の不登校の要因として「親子の関わり方」が14.6%を占め，「無気力，不安」の46.3%の次に多い。子どもの安定した適応が母親の安心感に繋がることが綾野ら[23]によって報告されており，子どもに不安がある場合は母親にも不安がある可能性が考えられる。ここでの「親子の関わり方」に母子分離の問題が関連しているか

は不明ではあるが，移行期の母子分離の課題を母親アイデンティティや母親役割意識の観点から明らかにしていくことは就学後の不登校の問題の理解にもつながるのではないだろうか。

5. 今後の課題

本研究は同じ市内にあり母親の就労の状況などの傾向が近い幼稚園2園の結果であるため，幼稚園児の母親の結果として一般化することはできない。近年，共働きの家庭が増え，預かり保育を実施する幼稚園も増えたことから，幼稚園によって母親の就労や育児の状況の傾向が異なる可能性も考えられる。本研究で年少入園前の預かり保育利用の有無の観点から母子分離意識に違いが見られたことから，保育所の母親の子どもに対する分離意識も含めて検討することで，幼児の母親の子どもに対する分離に関する理解をさらに深めることができると考える。

また，本研究は縦断研究ではなく対象とした年少母と年長母が異なるため，母親の幼稚園3年間の変化自体をみることはできなかった。今回の結果を踏まえ，同一の対象者による幼稚園3年間を通した縦断的な検討も必要である。さらに，昨今共働きの家庭が増え育児に積極的な父親も増加していることから，父親の子どもに対する分離意識および，父親と母親の子どもに対する分離意識の比較についても今後の課題とする。

本研究で対象とした幼稚園2園の母親の子どもに対する分離意識は〈母親優位感〉〈登園後の心配〉〈登園後の恋しさ〉〈分離肯定感〉の4因子から構成されていることが明らかになったが，何がこれらに関連しているのかについては不明であった。幼稚園3年間でのどのような経験が母親の子どもに対する分離意識に関連しているのかについても検討が必要である。また，母親アイデンティティは〈母親役割自信〉〈母親役割受容〉〈母親役割不明〉の3主成分から構成されており，これらの主成分と母子分離意識との関連を本研究で示唆することができたが，母親たちが具体的に母親役割自体をどのように意識しているかということについても本研究では明らかにすることができなかった。幼児の母親たちがどのように母親役割を捉えているのかということについても今後明らかにしていきたい。

付　記

本研究の一部はPECERA Annual Conference 2022でポスター発表をしたものです。研究に協力していただいた園の先生がた，お母さまがたに感謝いたします。

引用文献

1）Benesse（2016）保育園，幼稚園の入園前に心配したことは？．https://benesse.jp/kosodate/201604/20160404-3.html（情報取得日 2022.8.12）
2）内閣府（2019）令和元年度版　少子社会対策白書　全体版．https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2019/r01pdfhonpen/pdf/s2-2-2.pdf（情報取得日 2021.8.29）
3）吉本文子（2019）「完璧」を目指す選択と評価のはざまで―専業主婦の母親の子育て観を中心に―．共栄大学研究論集＝The Journal of Kyoei University（17），99–113.
4）柏木惠子・蓮香園（2000）母子分離〈保育園に子どもを預ける〉についての母親の感情・認知―分離経験および職業の有無との関連で．家族心理学研究／日本家族心理学会家族心理学研究編集委員会 編，14（1），61–74.
5）藤崎春代（2013）子どもが家庭に持ち込む園生活が親に与える影響．昭和女子大学生活心理研究所紀要＝Annual bulletin of Institute of Psychological Studies，Showa Women's University，15，33–44.
6）Hock Ellen・McBride Susan・Gnezda M. Therese（1989）Maternal Separation Anxiety: Mother-Infant Separation from the Maternal Perspective. Child Development, 60（4），793.
7）塩崎尚美・無藤隆（2006）幼児に対する母親の分離意識：構成要素と影響要因．発達心理学研究，17（1），39–49.
8）兼田祐美・岡本祐子（2008）ポスト子育て期女性のアイデンティティ再体制化に関する研究．広島大学心理学研究，7，187–206.
9）山口雅史（2010）母親になるということ　―母親アイデンティティを巡る考察―．あいり出版.
10）Erikson E .H（1950）Childhood and society．仁科弥生（訳）（編）．幼児期と社会1・2．みすず書房.
11）遠藤辰雄（1993）アイデンティティの心理学．ナカニシヤ出版.
12）服部沙織（2021）我が子の幼稚園生活が母親に与える影響．日本保育学会第47回大会発表論文集.
13）柏木惠子・若松素子（1994）「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み．発達心理学研究，5（1），72–83.
14）大日向雅美（2003）子育て支援は「親育ち支援」．育ちの科学．日本評論社．129.
15）楠本洋子（2017）親育ち尺度作成の試み ―子育て支援の質的向上を目指して―．大阪総合保育大学紀要＝Osaka University of Comprehensive Children Education，11，

157-168.
16）楠本洋子（2019）母親の「親育ち」が養育態度に及ぼす影響．保育学研究，57（1），114-125.
17）塩崎尚美（2002）幼児期の子どもに対する母親の分離不安の変化―幼稚園入園後の日記調査の分析．相模論叢（15），118-101.
18）坂上裕子・金丸智美（2017）子どもの幼稚園入園という移行体験を母親はどう支えているのか．保育学研究，55（3），21-32.
19）足立安正（2021）産後1か月の子育て状況と産後6か月の母親の育児不安との関連～第1子と第2子以降の違い～．摂南大学看護学研究＝Setsunan University Nursing Research，9（1），11-20.
20）櫻谷眞理子（2004）今日の子育て不安・子育て支援を考える―乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通じて（特集子育て支援における参加者の育ちをとらえる）．立命館人間科学研究（7），75-86.
21）住田正樹・中村真弓・山瀬範子（2009）幼児をもつ親の役割意識に関する研究．放送大学研究年報（27），25-33.
22）清水裕士（2016）フリーの統計ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案．メディア・情報・コミュニケーション研究，1，59-73.
23）綾野鈴子・西坂小百合・村上 康子・権藤桂子（2019）幼稚園から小学校への移行期の母親の適応要因．共立女子大学家政学部紀要＝Bulletin of the faculty of home economics Kyoritsu Women's University，65，93-102.
24）文部科学省（2012）通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/__icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf）（情報取得日 2022.11.18）
25）文部科学省（2020）令和2年度　児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要．https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf）（情報取得日 2022.11.18）